INFORMATION

歳末恒例・自分感謝祭は12月26日に開催!!

恒例の自分感謝祭は、例年通り12月26日に開催します。

この儀式は、今年一年をふりかえって、自分の行いを懺悔する、應典院だけのオリジナル法要。一人ひとり、懺悔のカードを仏前で浄焚(聖なる火)にくべ、新年の新たな出発を誓います(住職からのファイナルメッセージもあります)。

毎年、「心が洗われた気分」、「自分自身にご苦労さんと言いたい」、「世界が広がった経験がうれしい」など、たくさんの感動を招きました。

荘厳な電子オルガンの演奏の中、光につつまれながら、一年の終わりにふさわしい「鎮めの儀式」を堪能してみませんか。

なお、18時からの夜の部は、終了後に「年忘れ交流会」を開催、持ち込み歓迎ですので、こちらもふるってご参加ください。

◎應典院主催／寺町倶楽部協力
12月26日(火)　①14時～
②18時～
参加無料(交流会は参加費500円)
数珠をご持参ください。
申込みは事務局まで

第26回寺子屋トーク
21世紀法要

今世紀最後の寺子屋トークは、12月24日、「21世紀法要」と題して、芥川賞作家であり、時代を撃つ言論人としても著名な辺見庸氏を招き、開催します。

戦争、メディア、環境破壊等々、20世紀の象徴の影は次の世紀、また新たな不安を私たちに突きつけています。いま個として生きることの意味を、辺見氏と100人の若者たちの生の対話によって、浮かび上がらせようという趣旨です。

辺見氏へのインタビューに始まり、20代の若者たちとのシンポジウム、そしてフロア全体を巻き込みながら全体セッションと、徹底的に語り合うことにこだわった内容となっています。

また会場では、應典院に今年来山された4人の研究者、山折哲雄、鷲田清一、汐見稔幸、野田正彰各氏によるビデオコメントも上映、全体の最後を、21世紀に向けての祈り(法要)によって締め括ります。

詳細については、同封のチラシをご覧ください。

第3回舞台芸術祭
1月からスタート

新世紀のスタートを飾る事業として、第3回舞台芸術祭「SPACE☒DRAMA2001」が、1月13日より開催されます。

今回は、多様な舞台芸術活動を、とのテーマで、若手劇団の公演を始め、ダンスグループや町民劇団、子どもの演劇ワークショップなど、多彩なプログラムが展開されます。

中でも、2月19日から23日までの「108煩悩プロジェクト」では、現代美術のアーティストが制作した108体のマネキンが、應典院全体に展示される中、本堂ホールで多彩なアーティストが集合、日替わりでのプログラムが展開されます。

詳細については、後日あらためてご案内いたします。どうぞご期待ください。

いのちと出会う会

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

毎月第3木曜に開催しています。どなたでも参加できます。

第5回　1月16日(木)
「不登校の子どもと家族」
話題提供者
〈不登校新聞〉記者　福村幸子さん
◎時　間:午後6時30分～
◎参加費:500円
◎会　場:應典院
お申し込みは事務局まで。

【新入会員ご紹介】
(2000年12月10日まで)

前号発行以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
川口　英俊　東大阪市
木村　慶治　大阪狭山市
○学生会員
【大阪府】
吉田　高子　大阪市中央区

〈ご寄付をいただきました!!〉
副理事長の榛木恵子さんより、10,000円のご寄付をいただきました。ありがとうございました。

サリュ VOL. 23
應典院寺町倶楽部のニューズレター
発行日　2000年12月11日
(偶数月発行)
編集人　池野亮、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

[サリュ]
フランス語で救いの意

2000 DECEMBER
vol.23



約千年もの間、受け継がれてきた宮大工の技術。棟梁が弟子に教えるのは刃物の研ぎ方だけ。しかも、「柱に継ぎ手用の穴を彫るのも、機械じゃなくノミを使ってやらなきゃ。人が彫れば必ず悔いが残る。それがいいんだ」という棟梁。
不便や困難を乗り越えようとする意志こそが、伝統や文化を守り育てる土台になるのかも。新世紀に私たちが伝えていけるものは、さて……。

EVENT REPORT

寺町倶楽部秋の大イベント
「LIFE」をテーマにNPOが集合、コモンズフェスタ2000が終了!!

應典院寺町倶楽部、秋のメインイベント・コモンズフェスタ2000「LIFE——これが、私たちの生きるチカラ!」(第9回大阪生涯学習フェスティバル協賛事業／大阪市教育委員会他後援)が今年も開催されました。今回で3回目を迎え、ますます内容も充実。さまざまな分野で活躍する15のNPO団体が11月4日～12日の9日間、22の企画を実施し、期間中1000名をこえる参加者でにぎわいました。

今年のコモンズフェスタは11月4日、華々しくスタートしました。

各参加団体の代表者が一堂に会したオープニングイベントは、まずドキュメンタリービデオ『科学者として』を上映。東京の真中に巨大な病原体実験施設が建っており、そこに勤める科学者の、人間としての関わり方を描いた意欲作で、監督の本田孝義さんも駆けつけてくださり、ご挨拶を頂戴しました。

次に劇団「態変」の福森慶之介さん、的川哲也さんのダンスと山本公成さんの音楽とのコラボレーション、『水辺の詩』。即興的な身体表現と幻想的な音楽が織り成す不思議な雰囲気が本堂ホールを包みました。

また、コモンズ実行委員会15団体代表によるプレゼンテーションを実施。各企画の概要とともに、コモンズフェスタにかける熱い意気込みを伝えてくれました。

オープニング終了後は恒例の交流会。2階の気づきの広場は大賑わいで、NPOスタッフ、アーティスト、ボランティア、さまざまな人々がくつろぎながら話に花を咲かせていました。



今回のコモンズで特筆すべきは、開催期間を通して行われた現代美術作家集団「ART PACKING」による「life」展。15人の作家が16の作品を應典院の1～2階フロア、階段、また玄関や墓地にまで展示。実際に訪れる人々が手を触れることのできる作品や、参加することでできあがっていく作品など、アートが人と人との会話を生み出し、関係を育むという場面もありました。

今年のプログラムは例年にもまして多彩で、「司法」「哲学」「教育」「福祉」「まちづくり」など、個性豊かな企画が目白押し。連日会場は盛況でした。



なかでも、11月11日にはメンバーがみんな50歳以上(!)の劇団「発起塾」がコメディタッチのミュージカル『プンプンプン』を公演。ピンと伸ばした姿勢と溌剌とした表情に、観客もつられて顔がほころびました。82歳の女優さんもおられて、会場からは賞賛の拍手が贈られていました。

各企画のゲストも多彩な顔ぶれで、鷲田清一さん(大阪大学大学院教授)、森岡正博さん(大阪府立大学教授)、高口恭行さん(一心寺住職)、桂文福さん(落語家)など、コモンズフェスタによりいっそうの深みを与えてくださいました。

9日間の締めくくりとして、最終日の11月12日、寺町倶楽部主催の第25回寺子屋トーク「お墓の行方、大論争!　日本人の死に方パート2」を開催。碑文谷創さん(葬送ジャーナリスト)、森綾子さん(宝塚NPOセンター事務局長)、村岡潔さん(佛教大学助教授)を迎え、変化している日本人の終末期についてお話いただきました。



また、今年からは新たにモニターボランティアを公募。コモンズに参加した団体の活動現場にふれながら寺町倶楽部を客観的に評価し、パートナーとなってもらうことが目的です。コモンズフェスタの各プログラムに参加したり、参加団体を訪ねたりして、レポートを書いてもらいました。

12月2日には、関連企画としてシンポジウム「市民・協働・NPO」を開催。そこにも発表者として参加してもらい、コモンズフェスタ期間中に感じたり、気づいたりしたことについて、率直な意見を発表してくれました。

多くの人々が交流するコモンズフェスタ。今年は分野が広がった分、多様な出会いと交流が生まれ、味わい深いものになったと自負しています。今後も、年を追うごとにパワーアップし、お寺と地域と市民をつなぐイベントとして定着してゆければと思います。来年は新たにどのような味わいが加わるのでしょうか?　ご期待ください。

特別寄稿　開かれた場　應典院

サントリー不易流行研究所　清木　環

「活動を続けていくうちに、同じ価値観をもつ似通った人たちの集まりになってしまう。いろいろな人たちと交流できれば活動に広がりができるのに」。滞日外国人支援団体のNPOで活動をされている方と話す機会があり、このような悩みを聞きました。

私は都市、その中でも盛り場をテーマに調査研究を続けているのですが、ここでも同じような問題が生じています。

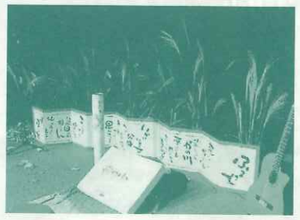
若い世代を中心に、盛り場に求めるものが大きく変化しており、出会いや刺激よりも、いつもの仲間といることに心地よさを感じる人が増えています。街に出かけても、同じ世代、同じ趣味、同じテイストの人たちで集まる同質化傾向が強まり、カプセル化し異質のものとは交わらないといった傾向が顕著です。盛り場の本質的魅力である異文化・異世代交流の場としての役割が薄れているのでしょう。

人とつながりたいという欲求がなくなるわけではなく、趣味やボランティアなどテーマや目的のある集いの場は少しずつ増えています。またショッピングモールのオープンスペースやオフィスビルに設けられた公開空地など、無目的な場所に人が集まりくつろぐ姿が多くみられています。

目的やテーマが一つでなくても、時間や空間を共有することで、人が集まり、出会い、ゆるやかにつながりを感じることのできるサロン的な場、空間的にも人間関係の面でも"開かれた場"が、これから盛り場が再生していく上で必要ではないかと感じているのです。

コモンズフェスタはさまざまなNPOが分野を超え、イベントやワークショップを通じて場を共有し、同じ方向を向かないことで、ゆるやかな一体感を感じることができるのではないでしょうか。日頃から多様な活動を受け入れている應典院の開かれたイメージと、演劇や映画、アートまで含めた多様なプログラムによって、むずかしいテーマでも気軽に参加できるオープンな雰囲気が創り出されているのです。

應典院は、都市の中でさまざまな人が交流し情報交換のできる開かれた共有空間として、今後さらに必要とされていくのではないでしょうか。



コモンズフェスタ
記念座談会

それぞれの場について語りあおう

コモンズ空間によせる想い

多彩なNPOが独自の企画を持ち寄り、たくさんの出会いを生んだコモンズフェスタ2000。

コモンズで初の試みとして行われた企画の中に、現代美術作家集団「ART PACKING」による「life」展と、「対話する哲学」を実践する試みとして臨床哲学研究会が行った「臨床哲学Cafe&Bar」があります。

それぞれの団体から樋口よう子さんと西川勝さんを、そして、アートを通してまちづくりを研究している小暮宣雄さんをお招きし、コモンズについて語り合っていただきました。



應典院の入り口に置かれた自動販売機(原仲裕三作)。よく見ると、売っているのは脳や内臓……。現実になるのは、いつ?

社会のベッドサイドに出ていく

――西川さんも樋口さんも初参加でしたが、参加動機は?

西川●"臨床哲学"が正式に大学の講義名になったのが3年前で、「臨床哲学とは社会のベッドサイドへ出ていくことだ」といいながら、実際にどういう活動を展開すればいいのかわからず、キャンパスから出ることができずにいました。そんなとき、コモンズの1回目から参加している"あかね連絡会"の長見さんから声をかけていただき、「いいチャンスだからやってみよう」と思ったんです。

樋口●私たち"ART PACKING実行委員会"は、いままで「まち系」と呼ばれてまして、まちの人を巻き込んでアートにふれてもらう活動を展開していました。今回はそういうイベントではなく、いのちの根源に立ち戻るというか、「life」そのものを考え直す企画をやりたいと考えたんです。

参加していちばん感じたのは、やはり屋内だったので、「雨風がしのげるというのは本当にありがたいことやなあ」ということ。いままでは屋外で雨風と戦いながらやってましたからね(笑)。

――"哲学カフェ"はどなたのアイデアですか。



11月5日に行われた「臨床哲学Cafe&Bar」。3つのグループに分かれ熱心な議論が行われた。写真は「自己決定」について話し合うグループ。

西川●マルク・ソーテ(※1)の著書『ソクラテスのカフェ』を読んで、哲学カフェ(※2)という活動のあることを知っていました。ただ、実際にやろうとしても、場所の問題などがあって、学生の力だけではなかなかできなかったんです。

今回は初めての試みでどうなることかと思いましたが、「貴重な機会に恵まれた。やってよかった」と、全員が感じています。これまでの哲学は「自分から語りはじめる」というものがほとんどでしたが、参加者からテーマを募ってそこから議論をはじめるという方法でできたことが自信につながったからです。研究会のメンバーだけで議論していても、それは臨床哲学ではありませんし、現実に應典院という場でできたことの意味は大きいですね。それに、「これからも継続してやってほしい」というアンケートもかなりあったんですよ。

――しいて反省点をあげるなら?

西川●事前に申込みを受け付けなかったことです。当日、フタを開けるまで何人来るかわからないという状況で、飲み物の準備など困りました。まったく、素人丸だしですよね(笑)。実質は参加者約65人、スタッフ20人、合計85人と盛況だったのでホッとしましたが。

樋口●私がいちばん反省しているのは、車イスの方々の視点を考えていなかったことです。高い位置にあるため、見えにくい作品もありましたから。

それと、私たちからお客さんに声をかけるような働きかけをしなかったことですね。應典院は本当にいろいろな立場や年齢の方がこられるし、アートに関心のない方々にどういう言葉かけができるか、というのがこれからの課題です。

――小暮さんは、どんな感想を?

小暮●オープニングの2部から参加しました。じつは、私の目当ては劇団「態変」の福森慶之介さんのパフォーマンスで、各団体のプレゼンテーションがあるとは知らなかったんですが、すごく面白かったです。「いろんな人が居るんや」と感じ、そういう多様な人たちの交流する場所にアートが生かされている、そしてアートが強くなっていく、と思いました。「アートって未知なものを体験すること。違う文化を出会わせること」とよくいうんですが、とはいっても、やはり何らかの形でアートと関わりがないと出会うことはできません。そういう意味で、この應典院の多様性や可能性を感じました。

コモンズは主体的な意志

――"コモンズ"は造語ですが、実際に参加して感じたイメージはどんなものですか。

西川●「いろんな人と出会うことで自分が見える」というか、他の団体のプログラムに参加して自分たちの課題が見えたような気がします。たとえば、異性介護の問題についての議論に参加して、臨床哲学でやっていた議論を客観的に見つめ直すというように、福祉の現場から自分たちの理論をふりかえることができた、という感じですね。

樋口●分野は違ってもよく似たところで悩んでいるというか、それぞれが抱えている問題に共通項はあるはずなのにつながっていけない、接点が見つからないと日頃思っていました。今回、福祉や他の分野の方たちと出会い、同じ土俵の上で話ができ、一つのきっかけができたと感じています。そういう意味で、「開かれた場の提供」という感覚が私にはあります。

――「コモンズ空間としての應典院」について、小暮さんはどういうふうにご覧になっていますか?

小暮●他の劇場の場合、たとえば演劇は全員が座って同じものを見て同じ時間を過ごしますよね。与えられた作品にどう反応し、どう自分のなかで消化するのか、それが観客にとってのチャレンジです。

ところが、ここで現代美術や臨床哲学が持ち込まれた場合、みんなが違う問いをもちよって、一人ひとり違う時間を過ごし、自分なりの答えを見つけようとする。そういった、多様な参加の仕方ができますし、他にももっといろんな冒険ができるのではないでしょうか。

また、ある種の強制力や責務が働いて集まる場が"パブリック(公)"だとすれば、一人ひとりが主体的な意志をもって集まる場が"コモンズ(共)"。そんな自発性を大切にすることさえ忘れなければ、まだまだ本当にいろんな展開ができると思います。

――「場づくり」は「まちづくり」と似ていると思いますが、小暮さんは「まちづくり」に果たすアートの役割をどうお考えですか。

小暮●まちづくりで必要なことは、その地域に固有の文化を生み出すことです。固有な文化とは"かけがえのないもの"だともいえますが、それは外からもってくるのではなく、すでに

貸出式の作品「かんてんにんげん」(井上明彦作)。赤ちゃんぐらいの重さの水が入ったゴムチューブを身につけ、参加者に液体的身体感覚を味わってもらう試み。

(※1)マルク・ソーテ……1947年生まれ、フランスの哲学者。パリ政治学院の哲学教授を務めるかたわら、個人や企業を対象にした「哲学相談所」を開くなど、普通の人々に向けて哲学を語る活動を続けていた。1998年に急死。

(※2)哲学カフェ……1992年、パリでマルク・ソーテを中心にして始められた、カフェでの哲学ディスカッション。参加費無料、出入り自由。哲学者が進行役となり、老若男女が議論を交わすためだけにやってくる。いまではアメリカ、メキシコなど約100カ所で行われている。



樋口よう子(ひぐち・ようこ)さん
ART PACKING実行委員会
①高校講師、②O型、③『現代文明は生命をどう変えるか』(森岡正博・法蔵館)、④野菜

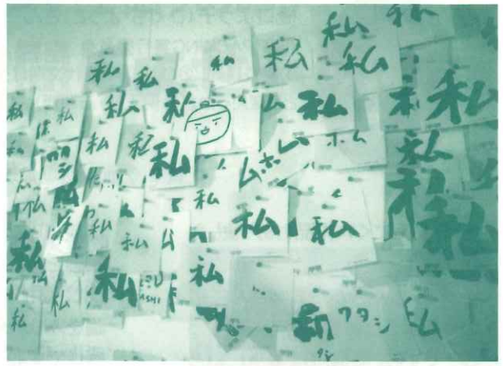


小暮宣雄(こぐれ・のぶお)さん
芸術環境研究者、京都橘女子大学文化政策学部助教授(2001.4〜)
①公務員(2001.3まで)、②B型、③『日本語の近代』(小森陽一・岩波書店)、④さといも

①職業、②血液型、③最近、読んで感動した本、④好きな食べもの



西川　勝（にしかわ・まさる）さん
臨床哲学研究会
①看護士、②A型、③『公共性』（斎藤純一、岩波書店）、④オムライス



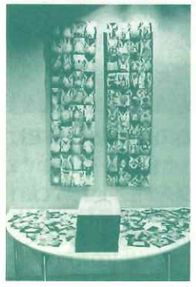
「千人千色」測定（加藤順子&木田陽子）。参加者が「私」と書き、自分の背の高さに貼っていく。毎日増え続ける「私」によって、できあがっていく作品。

あるものに気づくこと、まだ見えないものを発見することなのです。そして、その“かけがえのなさ”に気づかせてくれるものがアートで、未知なる体験、こころにしみるものとの出会い、思いがけない発見や気づきなど、アートの果たす役割は大きいですね。

未知の出会いとアウトリーチ

――コモンズは異なったものが出会うと同時に、お互いの境界線を越えて手をつなぐことも必要だと思います。アートの分野では最近“アウトリーチ”という言葉が使われるようになりましたが、哲学に関して西川さんはどうお考えですか。

西川●明治時代に哲学が日本へ輸入されてから、文献を解釈することや理論の体系を学ぶことが哲学だと思われています。「哲学」のもとの言葉「フィロソフィー」の意味は、「智恵を愛する」というように祈りに近いようなものなんです。ところが「哲学」と訳されたところから誤解が始まり、他の言葉の訳し方もひどいんですね。海外の哲学者は日常の言葉で書いているのに、日本では「自我」とか「唯物」とか、日常にない言葉に訳されてしまいました。だから、まず日常の言葉で哲学を始めることが必要でしょう。



――臨床哲学といわれる前に、そういう試みはなかったのですか。

西川●いえ、多くの哲学者は試みたんですよ。大学から外へ出た哲学者を「在野の哲学者」といいますが、人々とともに生き、対話する姿勢こそが本来の哲学者の姿だといえるでしょう。

それと、先ほどパブリックの話が出ましたが、コモンズでは自発的な参加の意志をもった人々が集い、それぞれ固有の存在として議論することができました。匿名ではない人々、一人ひとりが哲学者になったともいえるのではないでしょうか。

樋口●いまのお話を聞きながら、アートと哲学は似てるなと思いました。わざわざお金を払って美術館に足を運ぶというのは、日本ではよっぽど興味のある人だけです。しかも評価の定まった作品や、お金に代えられるアートに興味はあっても、自分の価値観でアートを感じたり、考えたりすることはしません。学校教育でもそういうことはしないし、ポンとボタンを押せば答えが出てくるもの、「1＋1＝2」というような決まりきったものだけで世の中は動いている気がします。

でも、そんな社会にも迎合することがアウトリーチなのではなくて、自分の表現や考えをあきらめずに伝え、相手に届いたとき、伝わった瞬間をアウトリーチというのではないでしょうか。

小暮●「アウトリーチ」という言葉があること自体、専門家とそうでない人、中央と周辺というような区別をしてしまっている感じがしますね。本当にアウトリーチできたとき、この言葉はなくなっていくのではないでしょうか。

それから「アートのアウトリーチ」に関していえば、アートは独立している分野というよりも、いまの社会全般を通底してあるものだと私は考えています。つまり、アートという言葉には「美術、芸術」だけでなく、「ずるさ、策略、作為」という意味もあって、アートはその時代や社会が抱えている問題を浮き彫りにするもの、私たちに見せてくれるものとしてあるはずなんです。いまの時代のアートというと“現代美術”“現代音楽”…ということになりますが、この言葉を使ったとたん「わからないもの」と敬遠されてしまいがちなので、私は「いまに生きている芸術」という意味で“リビング・アーツ”という言葉を使いたいと思っています。

――“臨床哲学”や“アートセラピー”など、二つのものを組み合わせた言葉が多くなっているようですが、これもアウトリーチの一つの形でしょうか。西川さんは看護士として、医療の現場から哲学を見ているんですか。

西川●私は「臨床の哲学的展開」といってますが、研究会の他のメンバーは「哲学の臨床的展開」だといってます（笑）。どっちにせよ、「語るのではなく、聴くことの哲学は可能なのか?」ということを考えているので、そのあたりは看護士としての立場と重なりますね。私自身、看護やケアは医療としてだけでなく、哲学としての看護があるはずだと思っていますから。

「まちづくり」は「みちづくり」

――最後になりますが、これからの課題というか、それぞれでやっていきたいことをお聞かせください。

西川●看護やケアは一方向ではなく双方向のものだと思っていて、そこが哲学との共通点だと考えています。相手に自分の言葉が届いているか、相手は自分の言葉を受けとめてくれているか、そんな姿勢を大切にしながら、いろいろな人と顔の見える距離で対話し続けていきたいですね。

樋口●今回のコモンズのテーマ「LIFE」について考えてみたとき、生きていることは偶然で、人間にとって平等なのは死ぬことだけじゃないかと思ったんです。“たまたま与えられた生”というか、生きていることの不思議さを問いかけたのが今回の企画です。

そういうふうに、アートを通して社会や未来を見せていく、人々に問いかけていくことを続けていきたいと思います。

小暮●私はもともと役人で、個人のレベルから始まるコミュニティづくりをしたくて自治省に入りました。いままでは地域共同体としてのコミュニティがすでにあって、人々がそこに合わせながら暮らしていたというか、生きにくさを感じてしまう状況でした。でも本当は、自分たちの暮らしやすいコミュニティを自分たちの手で創り出していくべきなんです。

「まち」は私たち一人ひとりが通っていく「みち」が組み合わさって広がったもので、まちづくりもコミュニティをつくることも、けっきょくは人が生きるためにあるもの。アートも人が生きるためにあって、実生活や実世界そのままがアートなのではなく、人



が生きていく上で通過する一つの「みち」なのだと思います。つまり、アートに出会うこととは、私たちがこころを震わせながら通っていく「みち」を見つけること。そして、生きやすいコミュニティをつくることとは、アートという「みち（未知）」と実生活のための「みち（道）」がバランスよく自在に交差していることだと考えています。

應典院には、これからもアートを生かした場づくりをしていってほしいと、期待しています。

――今日はどうもありがとうございました。

最期の自己決定は……第25回寺子屋トーク

コモンズフェスタ最終日の11月12日（日）、第25回寺子屋トーク「お墓の行方、大論争!～日本人の死に方PART2～」を開催しました。

ゲストに、葬送ジャーナリストの碑文谷創さん、宝塚NPOセンター事務局長の森綾子さん、佛教大学助教授の村岡潔さんをお迎えし、第1部でパネルディスカッション、第2部で参加者からの質問をもとにした議論を展開しました。

碑文谷さんは、「最近のお葬式の傾向として、社会的立場を考えたもの（盛大な社葬など）よりも、本人や家族のために行う儀式にしようと、密葬などが好まれるようになってきました。こういう動きはお葬式だけでなく、死にまつわるさまざまな局面で“個人の納得”を重視した自己決定が行われるようになってきた現れです」といいます。



森さんは、日本生前契約等決済機構のアドバイザーとしても活動している立場から、「自分の死に方を決めるということは、生きている“いま”を問い直すこと。そしてそれは、家族や親戚との人間関係はもちろん、自分のこれからの生きる姿勢を決めることにもなるのです」と語られました。

村岡さんは、「最近の医療現場では“インフォームド・コンセント”がさかんに言われ、患者の自己決定を尊重しようという動きが活発になっています。ただ、決定権を患者にゆだねることで、『あなたが決めたのだから、結果についても自分で責任をもちなさい』と、医者が責任放棄してしまう恐れもあります。いのちをめぐっては難問が多いだけに、すべて本人の自己決定に任せていいのかという議論も必要でしょう」と問題提起されました。

いままで「～するべき」と思われてきた“死に方”に多様な選択肢があることを知らされ、「自分はどうしたいのか」を一人ひとりが真剣に考えなければならない状況が迫ってきているといえるでしょう。「自分で決めたくない」と自己決定することも含めて、これからますます活発な議論が展開されていくことが求められている、そう感じたひとときでした。

CLUB TOPICS

活発に議論が展開

第4期理事会開催報告

6月の総会を終え、新体制がスタートした寺町倶楽部。
新理事を6名を迎えた理事会も、寺町倶楽部の基盤固めのため、8月からほぼ毎月理事会を開催、活発な活動を展開しています。
これからは、定期的にサリュでその進行状況を報告してまいります。

新理事による理事会は、8月1日に始まり、ほぼ毎月1回のペースで開催しています。

発会からの3年間、倶楽部の可能性を探りつつ、様々な取り組みにチャレンジしてきたものでした。

4年目を迎えた今、この3年間が意義深いものであったこと、そしてこれからの方向性が見えつつあることと同時に、様々に課題も明らかになってきました。

大きな課題としては、例えば会員の減少。ピーク時には、350名の会員数だったものが、現在では約170名にまで減少しています。その原因として、「倶楽部の目的が見えない」、「会員同士の交流が活発でない」などの声が聞こえてきます。

また、事業についても、「事業の一貫するテーマが見えない」などの指摘があります。

そこで、理事会では、「ビジョン及び会則について」、「会員の増強」、「収入源の確保」を大きなテーマとして、議論を進めています。

3つテーマをみてもわかるように、小手先の課題を解決するというものではなく、倶楽部の全体像を改めてとらえなおし、そして再構築するという意味で、活発に意見が交換されています。

新しく理事就任された方は、各方面でご活躍され、その経験に基づいた的確なご意見は、諸課題の解決に向け、大きな推進力となりうることに違いありません。

今後、理事会での議論は、定期的にご報告してまいりますので、会員みなさんからも多くご意見を頂戴できればと思います。

VOICE ボイス

今回のVOICEは、今年度から理事にご就任いただいた関浦照隆さん。現在、中小企業診断士、NPOコンサルタントとしてご活躍なさっておられ、最近ご自身でもNPO法人を立ち上げられました。



昨年の2月、大阪国際交流センターでNPOマネージメントセミナーで、初めて秋田住職とお会いしました。それがきっかけで、4月の「夜桜会」に参加したのが、應典院との出会いです。

人と人とが交流できる場、大阪にこんなところがあったんだなあ、というのが第一印象でした。夜桜会というシチュエーションもあってか、ほのぼのとした、人間味のある場所で、世代が違う人が人生を語り合い、心の交流をする。新しい発見をでした。

資本主義社会は利潤を追求することが第一の目的です。ですから、ビジネスの中では、人間関係を形成するには「共通の利益がある」ことが、大きな要因になります。悲しいことに、今の多くのビジネスマンは、そんな人間関係がほとんど。そのことが、現代人の「人間らしさの喪失」につながっているのではないでしょうか。

今の厳しいビジネス社会では、儲けることが最優先されます。本来、人との信頼関係というものは、互いに利益抜きの関係でないと成立しない、と私は思っています。ですから、素の自分に向き合い、ありのままの私で人と交われる應典院という「場」は、とても貴重ですね。

現在、NPOコンサルタントという仕事をしています。企業は金銭的な結合体、それに対しNPOは人的な結合体といえるのではないでしょうか。多くのNPOと関わりを持つ中、人と人のつながりをどうマネージメントしていくのが一番苦労しますが、やりがいがありますね。

寺町倶楽部も3年を終え、いま変革期にあると思います。3年間は、創業期として足場を固める時期で、これから本格的な活動を展開していくために、目標を明確に見定めていくときでしょう。

私のイメージでは、ゆるやかな人的ネットワークを構築していくことが寺町倶楽部の使命ではないかと思っています。倶楽部はその中心で、ハブ空港のような役割かな。いろいろな人が、それぞれの世界を描きながら、それをつなぎあわせ、全体を創りあげていく。

今、自分が生きているという実感を持ち、自らの人生を観照する。宗教的ないやしの場である應典院の中で、寺町倶楽部は、そのインフラづくりを目指すべきだと思います。

秋田住職発 應典院掲示板

去る11月12日、應典院で3回目の子ども七五三法要を厳修、今回は15名の子どもとその家族が参詣してくれました。晴れ着姿の母子も多く、本堂の荘厳と相俟って、古式ゆたかな儀礼とすることができました。

毎回思うことなのですが、導師として一人ひとりの子どもたちと向き合いながら、ぼくの胸にある申し訳なさが去来します。言い換えれば、無垢なる存在に対する心からの畏怖でもあり、またいささか薄汚れた自身への気恥ずかしさでもあります。

カンバスは絵の具によってどんな色にも染まりますが、もとはまっさらな白地であったことを忘れてはなりません。すべての人間の出発が無垢だとしたら、その無垢を真に染め抜くものはその回りにいる私たち大人の責任でしょう。

いやぼく自身がその原色を失っていないか、ふと自問をしたくなる七五三の法要でした。

■谷川俊太郎さんとトーク

憧れの詩人・谷川俊太郎さんとお話する機会がありました。去る11月30日、「天王寺ヒューマンセミナー」として開催された谷川さんの詩の朗読とコンサートの舞台のひとこま。地元の人権推進委員として司会を担当しましたが、事のなりゆきで壇上で15分ほど二人でお話をすることになった次第。

来年70歳とは思えない、永遠の少年・谷川さんのこころと人柄にふれることのできた至福の一時でした。いつか應典院にお招きしたいなあ。

■緋月真歩さん創作人形展閉幕

人形作家・緋月真歩さんの個展が11月19日から1週間、本堂・ロビーで開催、期間中大勢の来場者でにぎわいました。初日はオープニングイベントとして、有名な胡弓奏者・楊興々さんのコンサートやノンフィクション作家・野田正彰さんの講演などを開催、緋月さんの不思議な人形世界を彩りました。



應典院がギャラリーとして全館開放されるのは、落慶時の橋口譲二さんの写真展以来。時空いっぱいに静謐と熱情を漂わせる、堪能の1週間でありました。

■中学生3人が体験学習

去る11月14日から3日間、中学2年生の女子3名が應典院にボランティアとして参加しました。これは、地元夕陽丘中学校の「就労体験学習」の一環として行われたもので、同学年180名が地域の事業所に見学参加、地域と子どもの関係を見つめ直す絶好の機会となりました。

3人には簡単な事務や掃除、また、大蓮寺で勤行やお墓掃除なども体験していただきました。なかなか緊張がとれなかったようですが、真面目に精一杯取り組んでくれました。

■ボランティア学習のシンポに

来年はボランティア国際年、各方面でいろいろな取り組みがあるようですが、新年1月13日「地域が育つボランティア活動」のシンポジウムに、PTAを代表して出講、和歌山大の松浦善満さんや教師、NPOの関係者と話し合うことになりました。

應典院とは長いおつきあいの関西こども文化協会が、大阪府から委託されて取り組む大仕事。こちらのワークショップ開発委員の任も受けています。いよいよ行政とNPOがいっしょにパートナーシップをとる時代、NPOから地域社会の可能性がますます高まったといえます。

ちなみに、このたび應典院寺町倶楽部でも、市立青年センターから来年3月演劇祭の一部の企画を受託、小規模ながら得意分野ではじめて行政の事業にかかわることになりました。

應典院で初の映画試写会

去る10月25日、應典院ではじめて35ミリ劇場用映画の試写会を開催、約100名の参加者が一夜だけの映画館を堪能しました。

上映された映画は、緒方明監督の「独立少年合唱団」。70年代の全寮制中学校を舞台に、合唱に情熱を燃やす少年たちの人間ドラマで、デビュー作でいきなり今年2月のベルリン映画祭で新人賞の快挙となった話題作です。

インディーズ映画界出身の緒方監督は秋田住職との旧知の関係で、そのことから製作・配給会社のサンセントシネマワークスの協力を得て実現の運びとなりました。

当日は緒方明監督をはじめ、寺町倶楽部理事・日本吃音臨床研究会の伊藤伸二さんらとの楽しいトークもあり有意義でした。

